退董・晋山式を挙行

震災から一年－諸堂修復落慶法要

宮崎 大本山永平寺 貫首を迎えて

神戸・曹洞宗東福寺

壊滅的な被害からの復興

兵庫県南部地震から一年――。神戸市中央区国香通の曹洞宗東福寺住職圓通幸温氏（六二）は、伽藍修復完成を契機に三十余年勤続の住職引退を決意し、十五日に大本山永平寺の宮崎奕保貫首を迎えて、住職退任（退董）式と新命の住職就任（晋山）式、並びに伽藍修復落慶法要、震災横死者諸霊一周忌法要等を厳修した。

東福寺は明治の末、三重県出身の圓通祖道和尚が神戸・湊川のほとりに庵を結んだのが草分けで、明治四十五年、現在地に土地八百坪を購入して伽藍を整備。本尊に一光三尊の善光寺如来を勧請し、宗派を超えた布教活動を展開して“小野の善光寺”と呼ばれた曹洞宗の寺である。

開山遷化の後、兼務住職の時代を経て、嗣子の幸温氏が昭和三十九年に三世を継承した。以来、幸温住職は三十余年の間、空襲を免れた開山当時の伽藍護持に心を尽くし、念願の六角鐘楼堂を建立、また境内諸堂の整備を重ねて今日に及んだ。

ところが昨年一月十七日の大震災で、神戸市の美術建造物に指定されている本堂に亀裂を生じ、外堀が崩れ、鐘楼堂は柱が根元から折れてしまうなど、壊滅的な被害に遭った。一年がかりで修復を果たしたが、総ケヤキの重厚な本堂をもと通りに復元することは経済的にとうてい叶わず、無念の思いを残している。

伽藍修復を終えた幸温住職は、十年前に胃癌を手術した後、体調が十全とは言えない状態にあることに加えて、震災で無常感を味わったことなどから、副住職の良樹氏に住職を譲ることを決意。諸堂修復落慶と震災横死者諸霊一周忌の法要と併せて、住職退任式と新命の晋山式を執り行なったものである。

法要は前日の十四日午後二時から良樹新命の晋山式が挙行され、翌十五日午前十時から幸温住職の退董式、続いて良樹新命の結制上堂、宮崎永平寺貫首の導師による震災復興落慶法要並びに震災横死者一周忌法要、さらに首座法戦式などが行なわれた。

退董式では、兵庫県第一宗務所の三輪昌伸所長（伊丹市・墨染寺住職）、兵庫県有道会の長谷川禅道会長（多紀郡篠山町・徳寿寺住職）、曹洞宗宗議会の千代川耕宗議員（千葉県印旛村・迎福寺住職）が「陣退鼓の辞」を贈り、幸温氏の功績を称えて慰労の言葉を述べた。

三輪所長は、幸温氏が愛知県豊橋市に生まれ、花園大学仏教学科に在学中は山田無文学長に師事して「碧巖録」の提唱に参じた求道の人であり、永平寺に安居修行し、住職就任後、三十五歳の若さで兵庫県第一宗務所長に選ばれ、現在は宗議会議員として活躍してきたと経歴を紹介。

県有道会の長谷川会長は、幸温氏が住職とともに宗議会議員も引退することについて、「後任の宗議は圓通老師の宗政に対する熱意と信念を継承することを願う」と要望。宗議の先輩であり、道友として深く交わってきた千代川宗議は「私は二年先に宗議になり、年齢も十歳ほど上だが、いろいろなことを教えていただいた。この方の厳しさは、いつも温かいものがその中に流れている。新命方丈は師匠の偉業を継いでほしい」と感慨を吐露した。

この後、良樹新命が上堂して問答を展開。西堂を永平寺の北野泰成侍局長（加古川市・願成寺前住職）がつとめ、永平寺専使として有道会常任顧問の来馬規雄宗議（東京都・高岩寺住職）、総持寺専使として総和会の加藤大真宗議（大阪市・永春寺兼務住職）が臨席し、祝辞を述べた。

伽藍修復落慶と震災横死者一周忌の法要導師をつとめた永平寺の宮崎貫首は、法要後の垂示の中で次のように仏法の要諦を説いた。

「私はことし九十六歳を迎えたが、関西で大地震が起こったのは初めてだ。人生百年生きても遭わないような災難に遭った。天災は人間の力ではどうすることもできない。その中に生きているかすかな生き物が私たちだ。天地無窮であるからといって反り返って生きていいということではない。大地はいくら踏んでも割れないからといって、どすんどすと歩いていいというわけではない。それが天地の法則ということだ。

仏法では三界は心の表われであるという。形あるものにはみな心があるということだ。それを信じるのが宗教であり仏法である。形が現われるところには必ず心が備わらなければならない。三業に仏印を証するというが、身口意の三つの働きを整えるには、まず形を整えなければならない。形を整えると心が直くなる。身心一如が道元禅師の教え。この尊い仏法を蘇らせてほしい。真理に無条件で頭を下げることを自分で確かめてほしい。目で見えない仏の命を大事にして下さい」

道友の慰労の言葉を受ける幸温前住職(左) [写真は省略]

(c) 1996中外日報社(デジタル化：神戸大学附属図書館)